

テーマ「身に付けさせたい力を、小中高で具体的にどう教える（育む）か」

石田 実貴（三重県・高校）

- 1) チーム名： 教員の自己改革チーム
- 2) 身に付けさせたい力とその定義： 自信を個々に育む→自己の表出
- 3) 小中高でどう教える（育む）かの「具体的方法」
 - ・ 成功体験の積み重ね
 - ・ 相互評価
 - ・ 子どもの実態、状況に合わせた学習
- 4) その方法を実行するための条件（何が必要か）
 - ・ 教員の気づく力、意識改革
 - ・ 学校としての目的意識の統一
 - ・ スモールステップで子どもを見取り、指導する
- 5) われわれが明日からすべき初めの一步
 - ・ 子どもをよく見て、子どもの言うことをよく聴く
- 6) 感想、意見

小学校の教員（2名）、高等学校の教員（1名）とベネッセの社員の方との話し合いでした。まず、各学校の実態や授業や子どもの様子を出し合う中で、最初は「違い」の方に議論が偏ってしまった気がします。しかし話を進めていくうちに、授業で身に付けさせたい力や、子どもの教育にとって何が大切なのかということは、校種は違えども共通しているのではないかという意見に辿り着きました。例えば小学生だから〇〇、高校生だから△△ということではなくて、小学生でも高校生でも成功し、誉められると嬉しいし、自信もつく。思春期の高校生は恥じらいがあり表現はしないが、誉められて決して嬉しくないわけではない。そこを見極めながら教員は生徒と接していくことが必要なのではないかという意見も出ました。また、小学生はグループ学習をしているが、高校生は一斉授業しかしていないのでは（もしくはできないのでは）などという教員が持っているイメージや思い込みを、まずは取っ払う必要があるという最終的な意見が、グループ名（「教員の自己改革チーム」）に結びついています。

この会に参加させて頂き、感じたことがあります。異校種の連携の重要性についてよく言われますが、一人の人間を社会で幸せに生きていけるように教育する上で、そもそも連携なくして何ができるのかということです。私たちが日々目の前にしている子どもは生まれてからきちんと順序を踏んで、大人になります。高校生になった時の子ども人格や能力は、当然それまでに積み重ねられたものです。伸びる時もあれば揺らぐこともあり、それを含めて成長だと感じます。よって身に付けさせたい力の根幹となるものは、小学校でも高校でも同じであり、ただ「役割」や「難易度」が違うのだと思います。ある一人の子どもを前にして、「こんな力を身につけさせたいよね。じゃあ幼稚園ではここまでのことをします。小学校では～、高等学校、大学では～」というような役割分担をすることが連携なのではないかと議論の時に感じました。当然、学習指導要領はそのように考えられて作られたものですが、実際に教師が目の前にしているのは生身の人間であり、また地域や学校ごとにも必ず特色があります。今回の会でさせて頂いたような話を各々戻っていった地域で、共通した子どもに対してできたなら、これこそが本当の連携、教育なのではないかと思いつきながら帰途につきました。